

(社) 東洋音楽学会関西支部

支部だより

第20号 (1994-10-4)

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

**定例研究会のご案内**

(社) 東洋音楽学会関西支部 第171回定例研究会

(日本音楽学会関西支部第254回例会と合同)

日時 1994年 10月15日(土) 15:00~17:00

会場 京都市立芸術大学 大学会館交流室

会場へのアクセス

阪急電車桂駅下車東口 京都交通バス亀岡方面行き「京都芸大前」下車

バス時刻: 桂駅 毎時0分、30分(2:30発が適当)

(タクシーの場合は、1000円程度)

**【講演】**

「アメリカ・インディアン音楽研究における永続的課題」

ブルーノ・ネトル(イリノイ大学)

**【連続講座】** <音の今昔>

「サーキア、リラ、そしてカシーダ - エジプト音楽の諸相 -」

水野信男(兵庫教育大学)

司会・会場係: 中川 真

(社) 東洋音楽学会関西支部 第170回定例研究会の記録

(日本音楽学会関西支部第253回例会と合同)

日時 1994年9月17日(土) 13:00~16:30

会場 大阪芸術大学 芸術情報センター 5F視聴室

**【研究発表】**

「伎楽の実態と理念」 峯 雅彦(大阪芸術大学)

**【音楽学フォーラム6】**

「フィールドワークされる日本音楽」

シルヴァン・ギニヤール(大阪学院大学)

ヘンリー・ジョンソン(京都市立芸術大学)

ジョゼップ・マルティ・ベレス(スペイン高等学術会議=ゲスト)

櫻井哲男(熊本大学=司会)

総合司会: 渡辺浩子

## 第170回定例研究会研究発表要旨

### 「伎楽の実態と理念」

峯 雅彦

所謂伎楽には二つの意味があって一つは音楽、舞踊の総称として用いられ、もう一つは今日の日本音楽用語として仮面音楽劇を指すことになっている。ジャンル固有名詞としての伎楽は殆ど真の「教訓抄」に描かれる音楽実態つまり横笛、三鼓、銅拍子を、伴奏とする卑猥な舞踊劇であるというのが唯一の情報である。伎楽は大仏開眼法要で演奏されたが「伎楽鼓撃六十人」とあるように「教訓抄」のそれと異なる。味魔之によって伝えられ諸寺で演奏された伎楽の音楽実態については必ずしも明らかではない。

「後漢書」、「旧唐書」の用例では伎楽を一般の音楽、舞踊、芸能の総称として用いていた。音楽の総称としての用法は日本、中国に共通している。「法顕伝」ではインドで行われた仏伝を題材にした舞踊劇であり「洛陽伽藍記」では行像とその演じられる奇術、曲芸、舞踊劇の総称である。

逆に「教訓抄」の伎楽の音楽実態を中国で探してみると「教坊記」に似たような所作があり、唐の宮廷散楽の中の歌舞戯がそれに近い。日本は唐の散楽を輸入しそれを伎楽と呼んだことになっているが、しかし奇術、曲芸を伎楽という名で演奏したことは不明でやはりそれらは日本でも散楽とよばれていた。味魔之が唐の散楽を伝えることは時間的に不可能であり左右衛府は雅楽寮とは別に散楽を奏し大仏開眼法要では唐散楽と伎楽を別のジャンルであると認識していた。

そこで伎楽の多様な用例を整理する一つの方法は、殆ど真の認識の通りに読むことである。つまり味魔之が伝えたのは中国の音楽の総称であり、新羅の客をもてなす為に筑紫に運んだのも中国伝来の音楽である、呉楽は散楽と共に大仏開眼のころ伝来した、と。

## 第171回定例研究会連続講座「音の今昔」要旨

### 「サーキア、リラ、そしてカシーダ - エジプト音楽の諸相 -」

水野信男

エジプトの歴史は、大きく3層からなる-古代エジプト、コプト時代、そして今日までつづくイスラーム時代。このうち古代エジプトおよびコプト時代の壮大な文化遺産が、現代エジプト社会に色濃く影をおとしており、結果としてそれは、奥行きのある重層構造を呈するものとなっている。このことがまた、今日おなじアラブ諸国の一員でありながら、エジプトを他と明確にことなるものにしていく。

エジプトでは、今なお人々はナイル川をたよりに生きる。その恵みの大河に沿うグリーンベルトとナイルデルタ、そこに点在する大小の都市を一步あとにすれば、あとははてしなくつづく砂漠。だがそこでも、ときにはオアシスにワジに、彼らはわずかばかりの緑に身をよせ、牧畜と農耕を糧にひっそりとくらす。

こうして古代文明をうんだ悠久の地エジプトの、現代の社会と文化は、縦横に生と死、歴史と現代、光と影を交錯させながら、呼吸している。

エジプトに旅するものは、ツタンカーメンの墓からでた黄金のシストルム、金・銀のトランペットをながめ、そして「王家の墓」のレリーフに登場する楽器が、今なお民間でなりひびいているのをきく。町にはアザーン（祈りの呼びかけ）がひびきわたり、モスクではコーランが朗唱される。その一方で、コプト教徒もまた独自の祈りをささげる。そこでは文化の連続性・非連続性・変容性がはてしなく葛藤している。

今回の報告では、現代エジプトの民俗・宗教・芸術音楽の各ジャンルから、いくらかの採集例をとりあげ、この過酷な世界にしたたかに生きる民族とその音楽の諸相にせまる。

なおこの報告は、報告者が1989年からつづけている、日本学術振興会・中近東文化センター派遣および文部省科学研究費による、エジプト現地調査にもとづいている。

報告：大東純子

昨年度より行われている日本音楽学会の「音楽学フォーラム」は、今日的な課題を論じ合うことによって、音楽学研究の本質的な問題をクローズ・アップする場となっている。合同例会となった今回も、ますます増えてきた外国人研究者と日本音楽研究という、今日的なテーマをめぐってのパネルディスカッションであった。

まず、バックグラウンドもキャリアも研究対象も異なる3人の外国人パネラーから、用意されたペーパーが日本語で読み上げられた。マルチ・イ・ベレス氏〔スペイン〕は、外国人研究者が日本で研究する場合の可能性として、日本音楽（邦楽）自体、日本における音楽的現象全般、日本の音楽的生活に見られる普遍的な構造、という3つを想定し、とくに後者2つの分野が日本人と外国人の共同研究において将来有望な活動領域であり、日本人と外国人双方の相互作用の追求と計画的な統合によって十分な成果が期待できると述べられた。たしかに、それは国際的共同研究の理想であるが、少々楽観的すぎるのでは、という気がしないでもない。邦楽を研究対象に選んだ他の2氏の場合、日本での研究で直面する問題はずっと大きいようである。ジョンソン氏〔イギリス〕からは、「うち」と「そと」、「本音」と「建前」があらゆる局面に存在する日本では、精緻な研究のためには長期間の人間関係を要し、たとえアウトサイダーである外国人でも、複雑な日本的社会システムに従って行動することになるので、日本における外国人研究者の立場についての考察も主要な課題になる、という見解が示された。以上の2氏の発表が多少観念的であった（翻訳の影響かもしれないが）のに対し、自身の研究史から入ったギニヤール氏〔スイス〕の話はたいへんわかりやすく、外国人が日本で邦楽を研究する際に直面する問題を具体的に示すものであった。文献学的な研究をする場合には、外国人であるということあまり問題にならない（言葉のハンディは別として）が、美学的な問題に進もうとするとつねに不安定なアイデンティティーの上で研究しなければならない、つまり日本人も本当にそのように感じているかを注意深く観察した上でないと自分の感じたことを自由に口に出すことができない、しかし、この「アイデンティティーの揺れ」は研究の喜びでもある、という言葉で話はしめくられたのだが、筆者は最後の言葉に、大関昇進の際、「日本人の心をもって」と語った武蔵丸を思い浮かべてしまった。

後半のディスカッションは、言葉の問題もあって、あまりスムーズに展開したとは言えないが、司会者が提示した「Cultural background（文化環境）のちがいと研究の視点（視座）／立場」と「異文化としての音楽を研究する方法」という2つの柱のうち、どちらかといえば前者が論点となって進行した。紙面に限りがあるので、ここではその内容を詳述しないが、筆者の感想を1点だけ述べておきたい。研究者（日本人であっても外国人であっても）が自由に発言できない邦楽界の閉鎖的な制度を問題視する意見がフロアー（日本人）から出されたが、閉鎖的な「うち」グループを作り、自由な意見の交換を拒否するような体質は、伝統音楽の世界だけでなく、研究者の世界にもあるのではないだろうか。わたしたちは「日本で発表しても、研究の成果や方法についての詳しいコメント（評価）はほとんどしてもらえなかった」と遠慮がちに述べられたギニヤール氏の言葉を、真摯に受けとめる必要があるのではないだろうか。そうでなければ、日本音楽研究における、日本人と外国人双方の効果的な相互作用をめざす道は開かれないように思う。最後に、フォーラム開始直前にレポーターを命じられたため、急遽要請したにもかかわらず、快く録音記録をとって下さった大阪芸大のスタッフならびに院生の方々に感謝したい。

#### ◇編集室より

2年間、水野信男理事と共に『支部通信』を担当した。だった年3回の発行なのだが、というより、たった年3回しかない仕事であるが故に、意外に煩瑣である。内容的に支部例会と連動しているので、編集は例会担当が兼ねて行ったが、これも面倒な仕事である発送のほうは、毎回、庶務が担当してくださった。手足となって動いてくれた例会・支部通信および庶務の参事さんたちに、あらためてお礼を申し上げたい。と同時に、一部の若い世代の人達の、学会活動に対する情熱とボランティア精神の欠如も感じる。社会の変化の中で、学会のあり方も変わってきた。しかし学会活動というものが本質的にボランティアなものである点に、変わりはない。学会活動についてさまざまな思いを持ちながら、次期の担当者にバトンをお渡りする。 (櫻井哲男 記)

◇定例研究会について、発表などを常時募集しています。下記の方法によりご応募ください。

#### \*申し込み方法

発表の種別(研究発表・調査報告・資料紹介・研究演奏など)、発表題目、使用希望機器、希望月、所属、氏名、連絡先を明記の上、下記宛ご送付ください。なお、申し込み多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともありますので、あらかじめご了承ください。なお、次の例会は2月を予定しております。

#### 定例研究会のお問い合わせ

〒860 熊本市黒髪2-40-1 熊本大学文学部地域科学科 櫻井哲男  
Tel. 096-344-2111 (内線2469)  
Fax. 096-366-6957 (宿舎)  
〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学 水野信男  
Tel. 0795-44-2261  
Fax. 0795-44-2259 (水野宛と明記)

#### 住所変更等連絡先

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付  
(社)東洋音楽学会関西支部 葉書にてご連絡をお願いいたします。

発行：(社)東洋音楽学会関西支部

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付